The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	繋がる、裂かれる、傷む ： インドにおける代理懐胎のエスノグラフィー
Author(s)	島薗, 洋介
Citation	GLOCOLブックレット. 2015, 17, p. 33-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55584
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2

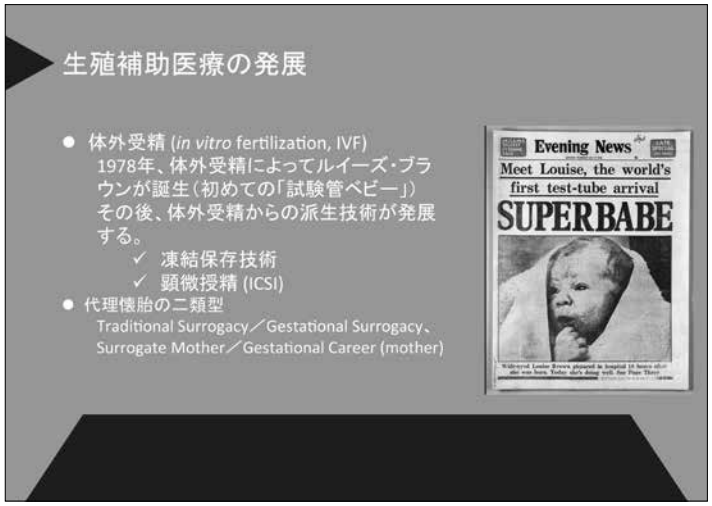
繋がる、裂かれる、傷む
インドにおける代理懐胎のエスノグラフィー

島薗洋介
大阪大学グローバルコラボレーションセンター講師

はじめに

過去数十年のあいだに生殖補助技術は急速に発展し、体外受精およびその派生技術が世界的に普及した。それと同時に、人間の生殖能力の「商品化」も進行しつつあり、精子や卵子の売買や商業的代理懐胎が拡がりをみせている。とくに、商業的代理懐胎は、近年、国際的に論争の的となっている。

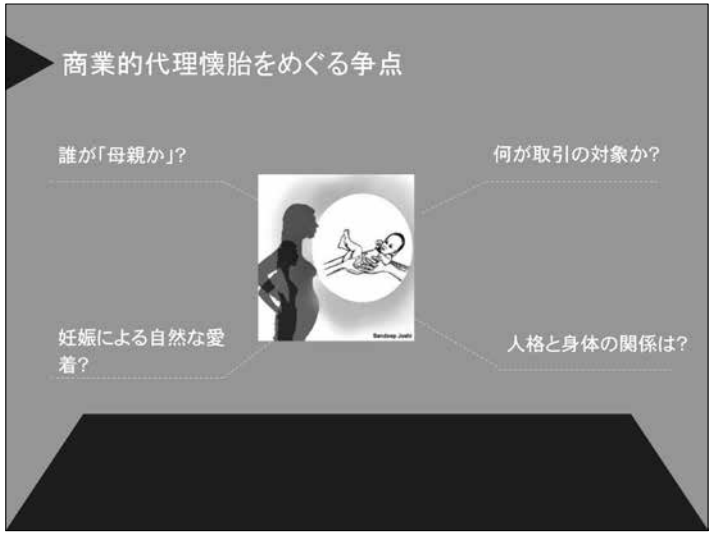
商業的代理出産が他国に先立って行われてきた米国では、1980年代から、代理母による子の引き渡しの拒否、親子関係や親権に関する裁判が社会的注目を集めた。それを契機として、代理懐胎そのものや商業的代理懐胎を法的に許容すべきかどうかが公的な論争の的となってきた。近年では、インドの貧困女性による「子宮の賃貸」(womb for rent)がインド国内外のメディアを賑わせている。インドでは、海外からの依頼者が代理懐胎のサービスを利用することも多く、出生子の国籍に関するトラブルがいくつも発生している。こうしたことから、インドでの商業的代理懐胎に関する倫理的・法的・社会的問題が、国際的に議論の的となっている [Bailey 2011; Banerjee 2014; 藤田 2013; 日比野 2011a, 2011b, 2011c; 松尾 2013a, 2013b; Pande 2009a, 2009b, 2010a, 2010b; 常田 2014; Vora 2009]。



(Slide 01)

しかし、そうした論議の中で、当事者である代理母の経験に寄り添った考察されることは決して多くない。他者のために、受胎し、妊娠し、出産するという特異な生の営みの現場（フィールド）に居合わせることや、代理母という「他者」の声を拾い上げようとすることは、商業的代理懐胎の是非をめぐる論議にどのような意義をもつのだろうか。本論では、この問題について、筆者が行ってきたインドのハイデラバードやコルカタでのフィールドワークに基づき考えてみたい。

1. 商業的代理懐胎の生命倫理



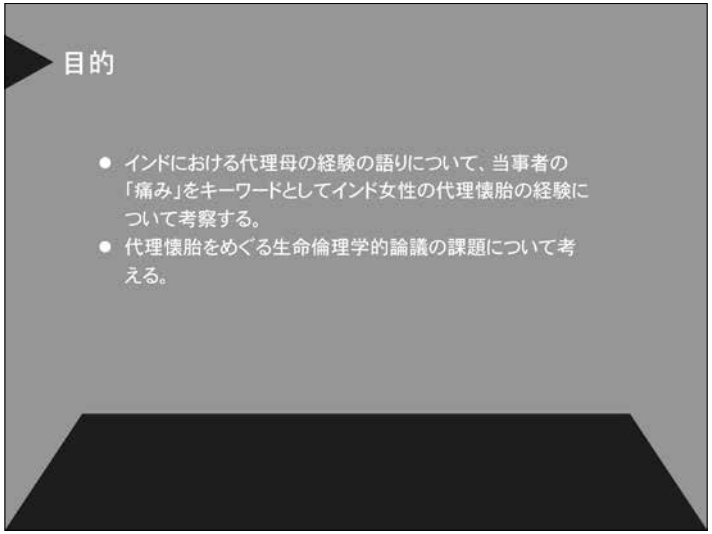
(Slide 02)

代理懐胎、特に商業的代理懐胎の実施の是非をめぐっては、国際社会に多大な議論が巻き起こってきた。その全ての論点をカバーすることはできないが、ここでは、以下の四つの重要な争点をめぐる議論を簡単に見てみよう[cf. Andrews 1988; Gostin 1988; Markens 2007; 荻野 2008; 大越 2008; 貞松 2009; Shanley 2002]。

まず、「誰が母親か」という争点がある。現在、世界で実施されている代理懐胎の大半を占める体外受精による代理懐胎では、三人の潜在的な「母親」がいる。代理懐胎の場合、このうち、誰を母親とするのか、という問題が浮上する。これは端に法的な問題ではなく、代理懐胎の是非に対する見解と直接に結びつく。もし、分娩者が母親であるとするならば、商業的「代理」懐胎は、実際には人身取引となる。これに対し、代理懐胎を肯定的に捉える論者は、しばしばケア・ワークのアナロジーに訴える。代理母は、正当な依頼者に帰属する受精卵と胎児を出生まで自らの子宮で預かっているにすぎないと主張されるのである。

出生子の母親の問題と関連する問題として、子への愛着をめぐる問題がある。商業的代理懐胎を批判する論者の一部は、妊娠によって胎児への愛着が自然と芽生えるものであり、そうした母子関係の自然な形成を無視する契約は許容されるべきではないと論じる。しかし、商業的代理

懐胎を肯定する論者は、妊娠が「自然」と子への愛着を育むものであるというのは神話ではないのかと疑問を投げかける [cf. Teman 2008]。むしろ、当事者が自らの意志にもとづいて契約を結び、労働に対して報酬を受け取ることは正当な経済行為であるということになる。



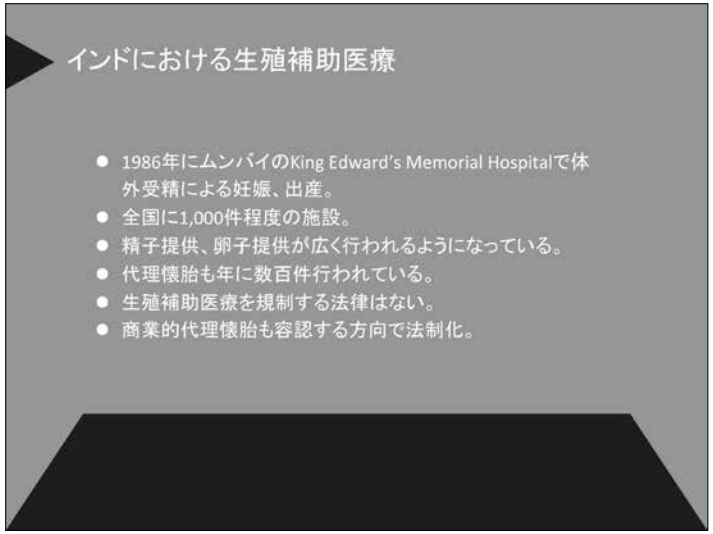
(Slide 03)

上に見たような対立は、究極的には、人格と身体との関係をどのように捉えるのか、という問題に収斂する。身体の生殖機能は、人格としての女性の一部であり、したがって、それを他の商品化されるサービスと同列に扱うのは、女性の人格の尊厳を傷つけるものなのか。それとも、人は自己の身体の所有者であり、その使用に関して、他者に危害を加えない限り、自由に使用する権限を有しているものとみなされるべきなのか。代理懐胎の契約が不当な「搾取」であるかどうかも、上記の人格と身体／生命の関係の問題に帰着すると言えるだろう。

以上のかなり図式的に商業的代理懐胎をめぐる議論を要約したが、それは、以下のような問いを提起するためである。上記のような論議全体の構図、あるいは言説の布置連関において、当事者である代理母の経験、あるいはそれを語る声は、どのような位置をしめるのか。以下では、この問いを念頭にフィールドワークをとおして得られた知見を述べていきたい。

2. 代理懐胎の現場(フィールド)

(1)インドの生殖補助医療



(Slide 04)

インドでは、1986年に国内発の体外受精児が誕生した。それ以降、急速に生殖補助医療が発展し、現在、数百件の生殖補助医療施設があると言われている。精子提供および卵子提供に加え、代理懐胎も事実上容認されており、数多く実施されている。

商業的代理懐胎は、急速に件数が増加しているだけでなく、地域的にも急速にインドの各都市に広がりつつある。デリーやムンバイといった大都市だけではなく、チェンナイ、バンガロール、コルカタ、ハイデラバードにも代理懐胎産業は拡がっている。さらに、メディアに頻繁にとりあげられるアナンドのパテル医師のクリニックのように、数多くの代理懐胎を手がけている地方の小都市のクリニックもある[日比野 2011a, 2011b,

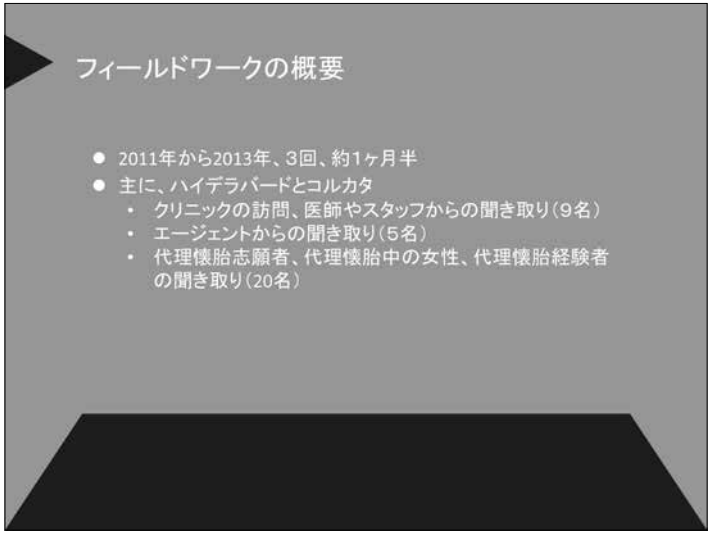
(写真1)

2011c; 松尾 2013a, 2013b; Pande 2009a, 2009b, 2010a, 2010b]。

インド政府は、2000年代半ばから、生殖補助医療に関する法整備に向けて動きだしている。すでに何度か草案が作成されているが、代理懐胎については、移植する受精卵の数を制限するなどの措置によって代理母の健康に一定の配慮をする一方、依頼者を明確に法的な親として定めることにより、円滑な商業的代理懐胎の実施を促すという方針を貫いている[藤田 2013]。一部の女性団体からの草案、法案への批判もある。しかし、全面的に商業的代理懐胎を禁止すべきであるという論調は決して強いわけではない。

(写真2)

(2)代理懐胎者たちのプロフィール

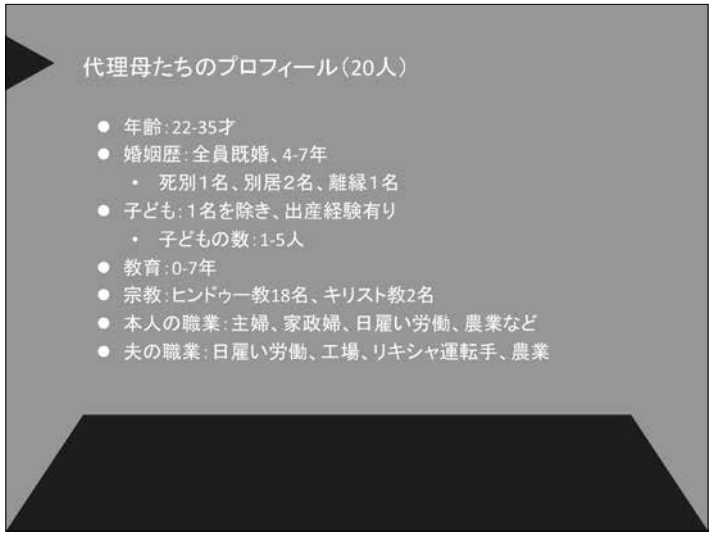


(Slide 05)

私が主に調査を行ったのは、コルカタとハイデラバードである。植民地

(写真3)

時代の旧首都であるコルカタは、バングラディッシュとの国境に近く、ベンガル語が主要言語となっている。ハイデラバードは、内陸の都市であり、ムスリムの人口が多く、バンガロールと同様にIT産業誘致の成功により急速な経済的発展を遂げつつある都市である。いずれの都市にも、年間100サイクルを越える体外受精を行っている有力なIVFクリニックが5から10施設ある。



(Slide 06)

私がフィールドで聞き取りをした代理懐胎者の女性たちのプロフィール

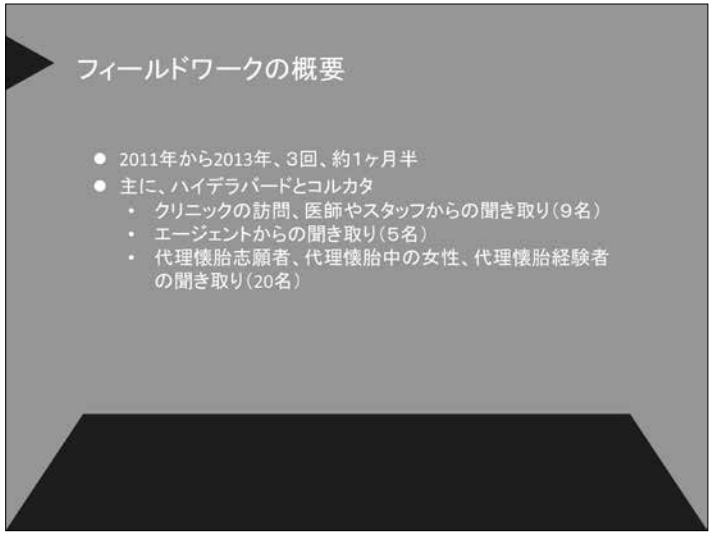
（写真４）

はスライドで示したとおりである。ほとんどの女性が貧困層に属しており、概して教育歴が短く、初婚年齢は20歳未満である。事実上、もしくは法的に離縁したものや寡婦が数人含まれており、全体で決して小さくない割合を占めていた。これらのことから、アメリカ、イスラエル、タイなどの従来の調査と比べると、インドでは代理懐胎者がより社会的に周辺化され階層の人々である傾向が強いことが推測される[cf. Ragoné 1989, Teman 2010, Hibino and Shimazono 2013]。

3. 代理懐胎の経験：労働、時間―空間、関係性

本節では、ハイデラバードおよびコルカタの女性たちが経験する代理懐胎の過程を、特に(1)労働としての代理懐胎、(2)身体変容と〈繋がり〉の生成、(3)切り裂かれる身体と〈繋がり〉という四つの側面に焦点を当てて見て行くことにする。

(1)代理懐胎という選択

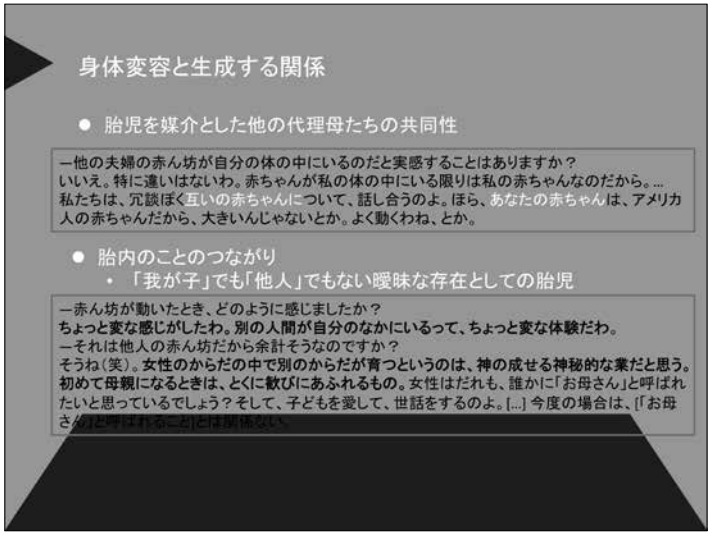


（Slide 07）

先に示したプロフィールから容易に推察されるように、実際に、代理母となる動機について尋ねると、それに対して、貧困やジェンダー規範とも絡んださまざまな苦難や苦境の物語によって応答する。たとえば、ポリオのために小児まひの障害をおった母方の叔父と13才で結婚した女性。アルコールに溺れた夫に家庭内暴力を受け、子どもをつれて実の両親のもとに帰った女性。夫との死別によって、生家に戻るも年老いた両親に変わって経済的困窮した世帯を支えることになった女性。このような女性たちが生活の中のさまざまな苦境について物語る。

とはいえ、代理母や代理母の志願者はただ日々の生活の糧を得るため、あるいは生存するために、代理懐胎を請け負うわけではない。代理懐胎の報酬の用途として、多くの代理母たちが挙げるのが、娘や妹の結婚の際のダウリー（花嫁支度金）や子どもの教育である。代理母になることは、家族のための献身、自己犠牲的としての性格を強くもつことが強調される。

(2) 代理懐胎という労働



(Slide 08)

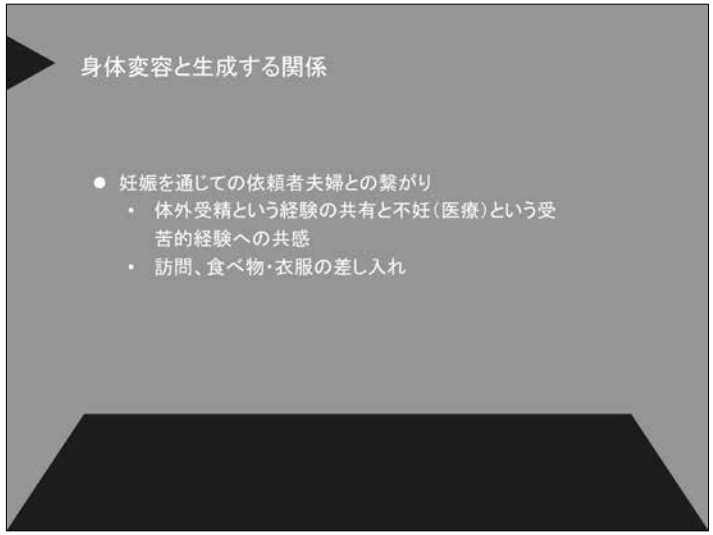
(写真5)

既に他の場所で調査した研究者に指摘されているとおり、代理懐胎にはスティグマがつきまとう。そのため、ほとんどの代理母たちは、隣人や親族、時には父母や同居している義父母にさえも、自らの労働のことを秘密にしたまま、慣れ親しんだ生活空間から切り離され、妊娠、懐胎、出産することになる。

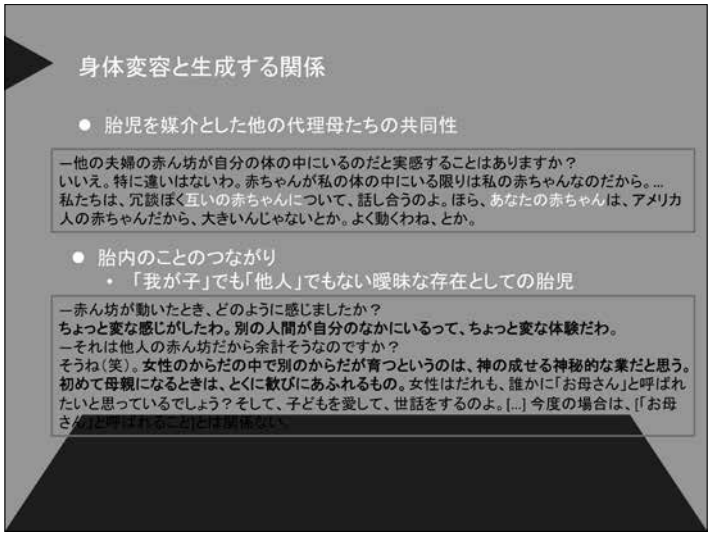
女性たちは、代理懐胎期間中、エージェントが用意した部屋（しばしばエージェントの家の一角）やクリニックが用意した代理母宿泊施設で生活することになる。医師、エージェントもしくは宿泊施設の世話人は、代理母に、繰り返し、自分の胎内にいる子どもが「他人の子」であること、「借りの宿」を貸しているにすぎないことを言い聞かせる。たとえば、栄養失調で発育不良にならないよう、女性たちの食事が管理される。ある女性は、以前は、出産前まで忙しく働いており、胎児の発育に対してそれほど注意を払わなかったのに対し、代理懐胎では、食べて、寝るという日常の単調な繰り返しのなかで、胎児の発育について神経質になったという。

アメリカにおける代理懐胎を調査したラゴネは、代理母にとって、子どもを抱えた女性が自宅で子どもの世話と容易に両立できる仕事としての意味を持つと述べている [Ragoné 1989]。また、テマンの民族誌からも、シングルマザーの代理母が多いイスラエルでも事情は同様であることが伺われる [Teman 2010]。インドの代理母たちは今までと大きく異なる環境のなかで、妊娠、懐胎、出産することになる。ここに、インドにおける「労働」としての代理懐胎の特殊な経験がある。インドの代理母は、社会的生活に伴うあらゆる労働から解放されてひたすら「無為に」過ごし、ただ生物学的に「生きること」ことによって、生命の再生産に奉仕するよう求められる。「剥き出しの生」が「労働」となる [アガンベン 2007]。

(3) 身体変容と生成する〈繋がり〉



(Slide 09)



(Slide 10)

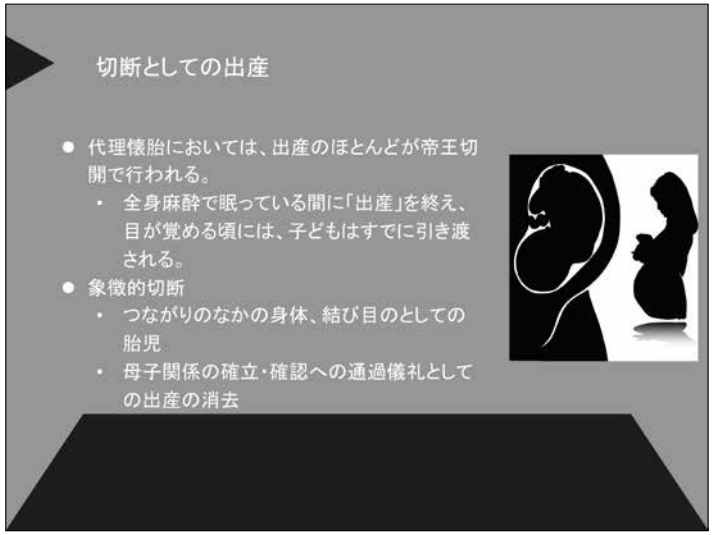
しかし、生の営みとしての代理懐胎には、このような側面に還元しきれない側面がある。それは、妊娠、懐胎に伴う様々な身体の変化をつうじて、女性を取り巻く社会関係が変化していくからである。

まず、代理懐胎に至る過程では、代理母となる女性は体外受精をとおして妊娠する。この経験をとおして、不妊治療を受ける女性と苦痛を伴う身体的経験を共有することになる。代理母は不妊女性への同情や憐れみについて語るが、「注射」による妊娠の経験により、他者（不妊女性＝依頼者）の痛み、悲しみへの共感はより実質を伴ったものとなるのである。また、胎児が育ち、腹部が膨らむと、依頼者が代理母を訪問することもある。体内の胎児が、代理母と依頼者という新たな〈繋がり〉を生み出すのである。

さらに、胎児は、代理母たちとの関係も媒介する。代理母宿泊施設では、代理母が自らの境遇、それまでの生のなかで経験したさまざまな困難などについて、互いに共有し合う場面も見られる。代理母宿泊施設は、医療者らが代理母の身体や生を管理する空間であるとともに、代理母が互いをケアする空間としての側面もあり、コムニタス―日常生活から離れた一時期的な空間において培われる共同性―の場としての性格も備えていると言える。

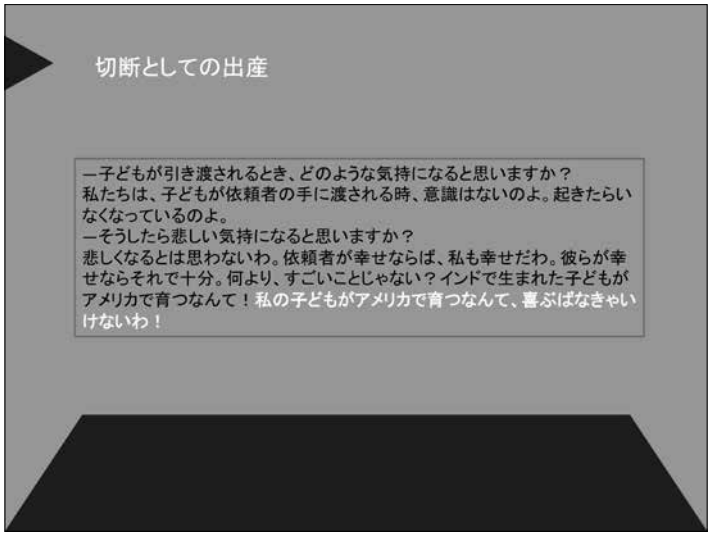
そうした空間のなかで、代理母たちは互いの胎児についても語り合う。興味深いのは、胎児について代理母たちが語り合うとき、しばしば、互いの体内に育つ胎児が「私の」、「あなたの」として言及されることである。自らの体内に子を宿すという点では、代理懐胎も通常の代理懐胎も似たような情緒的経験を伴うのだ、と述べる女性たちもいる。たとえば、スライドに引用したKの言葉は、別の人間が自分の体内に宿るという神秘、そして、それがもたらす歓びの共通性について語っている。胎児が「他人の子」として意識されながらも、代理母たちのあいだ、そして、代理母と胎児とのあいだにも、ある種の親密な〈繋がり〉が生成する場合がある。

(4)切り裂かれる身体／断ち切られる〈繋がり〉

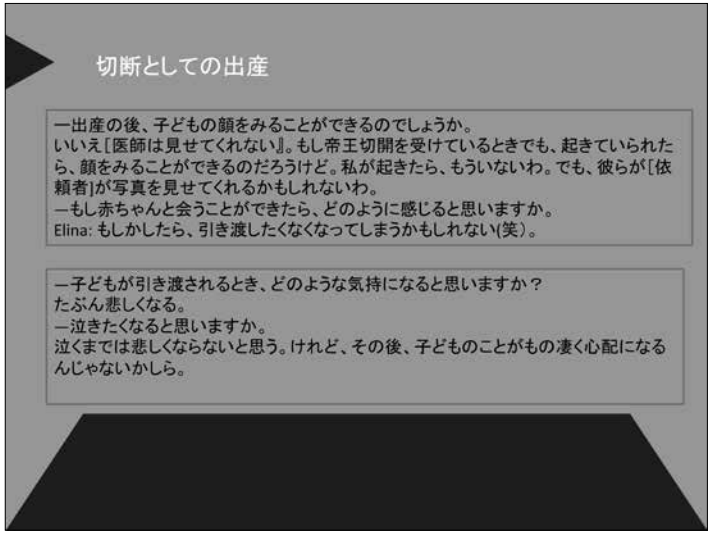


(Slide 11)

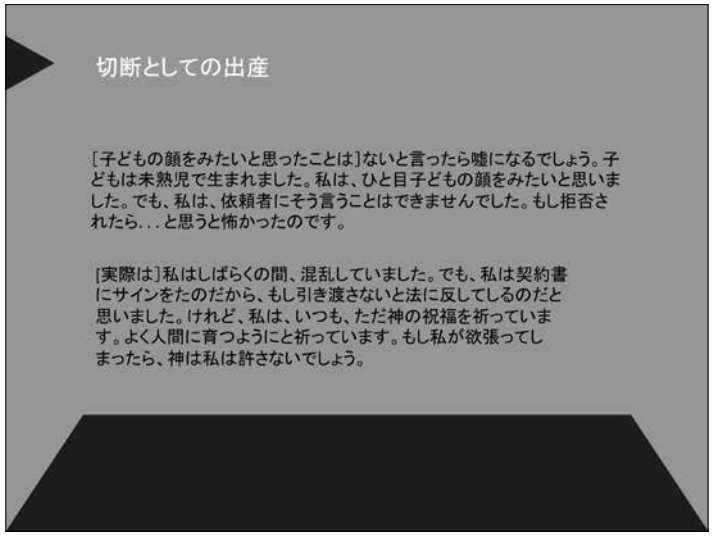
代理懐胎において自らの身体と社会関係が共に変化していくのは、通常の妊娠と同様である。通常の妊娠でも、腹部や乳房が膨らみ、それが他人の目に留まるようになるにつれ、女性は、他者と胎児について会話を交わすようになり、そして、「母（となる者）」となっていくだろう。それとともに、夫は「父（となる者）」となり、女性の父母や夫の父母は「祖父母（となる者）」となる。通常の出産の過程と代理懐胎を分け隔てるのは、出産という出来事の性格である。



(Slide 12)



(Slide 13)



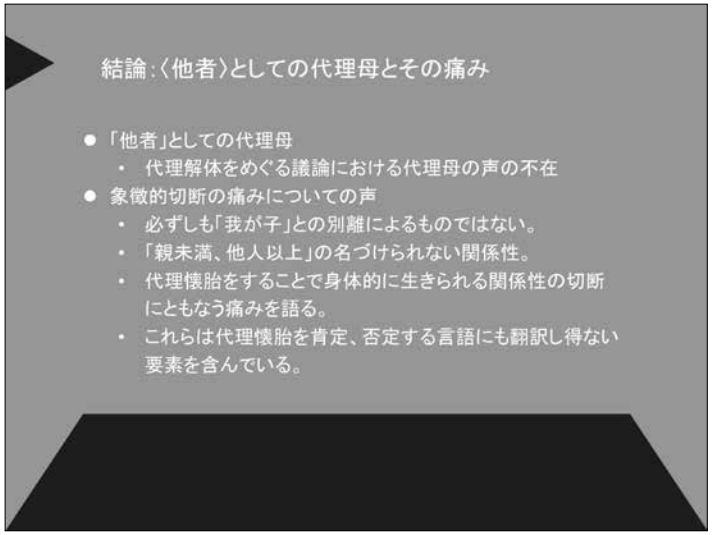
(Slide 14)

コルカタとハイデラバードにおける代理母たちの語るところによれば、彼女たちの出産を扱う医療施設は、すべての出産で帝王切開を行う。こうした帝王切開の頻繁な実施は、医学的事由によって説明できない。むしろ、帝王切開は、円滑な引き渡し、親子関係をめぐるトラブル回避のための措置として行われる。

私が聞き取りを行った代理母の中には、生まれてきた子ども、もしくは、その子どもを依頼者の母が抱く姿を見ることを望む人も少なくなかった。しかし、そうした望みは、医師やエージェント、依頼者に顧慮されることはない。代理母が麻酔で睡眠中に、子どもは依頼者に引き合わされ、代理母が胎児や依頼者と面会することはほとんどない。帝王切開という医学的処置は、女性たちとの身体を切り裂く。同時に、それは、胎児との〈繋がり〉や、胎児が象徴していた依頼者との〈繋がり〉を切り裂くのである。

代理懐胎における出産は、二重に〈裂かれる〉経験となる。スライドで引用したKの言葉からは、そうした経験に伴う〈傷み〉に関する声を聴きとることができるだろう。

結論



(Slide 15)

代理懐胎の現場（フィールド）に居合わせたと言っても、代理懐胎という特異な経験をする人々の想いを代弁できるようになるわけではない。私のフィールドワーカーとしての経験は時間と場所において極めて限定的である。私と彼女らの間には、言語的な障壁があるばかりか、性別、文化、社会の面でさまざまな差異が横たわっている。それでも、現場（フィールド）と公的議論という二つの場の挟間にあって、解釈者＝翻訳者としてのフィールドワーカーに語りうることは何であろうか。

私が着目したい第一の点は、コルカタやハイデラバードの代理母の女性たちが語る象徴的切断にともなう〈傷み〉である。しかし、その〈傷み〉を「我が子」との「別離の悲しみ」と同一視するのは性急である。なぜなら、ケアを通じて生成する代理母と胎児の〈繋がり〉は「他人以上、親子未満」の曖昧な関係であり、代理母の語りにみられる〈傷み〉は、胎児、依頼者、他の代理母との名づけられない〈繋がり〉が〈裂かれる〉ことに〈傷み〉だからである。

第二の点は、医療従事者や依頼者、そして、商業的代理懐胎を肯定する論者たちが、妊娠・懐胎・出産を商品化可能なサービスとすれば、多くの代理母たちの語りはそうした見方に対する違和的な要素を含んでいることである。とくに、身体変容ともに生成する〈繋がり〉の切断に伴う〈傷み〉に対する語りは、自己決定する主体の名の下に代理懐胎を肯定する議論や代理母を搾取の客体とみなして商業的代理懐胎を批判する議論、いずれによっても代理不可能な側面がある。

現在の商業的代理懐胎の法的・倫理的・社会的問題にかんする議論の問題は、代理母の声に耳が傾けられることが少ないことだけではなく、そのような声が代理出産の是非を語る議論の中から排除されてしまうように見えることである。例えば、自らが出生子の法的地位や、親権、監護権を争う場としての法廷では語られることはないものである。妊娠・懐胎・出産の商品化の是非をかたる倫理的・法的な言説からこぼれおちてしまう痛みや悲しみがありうる。そうした「他者」の痛みや悲しみの語りを受容しうる言語空間を創り出すことが、われわれにとって求められているのではないだろうか。

参考文献

アガンベン、ジョルジオ
2007 『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』以文社。
Andrews, Lori B.
1988 “Surrogate Motherhood: The Challenge for Feminists.” The Journal of Law, Medicine and Ethics 16: 72-80.
Bailey, Alison
2011 “Reconceiving Surrogacy: Toward a Reproductive Justice Account of Indian Surrogacy.” Hypatia 26 (4): 715-741.
Banerjee, Amrita
2014 “Race and a Transnational Reproductive Caste System: Indian Transnational Surrogacy.” Hypatia 29(1): 113-128.
藤田真樹
2013 「医療ツーリズムにおける法的・社会的問題―インドの商業的代理出産の動向―」『滋賀大学経済学部研究年報』20: 59-77。
Gostin, Lawrence O. (ed.)
1988 *Surrogate Motherhood: Politics and Privacy.* Bloomington: Indiana University Press.
Hibino, Yuri and Shimazono, Yosuke
2013 “Becoming a Surrogate Online: ‘Message Board’ Surrogacy in Thailand.” Asian Bioethics Review 5(1): 56-72.
Markens, Susan
2007 *Surrogate Motherhood and the Politics of Reproduction*. Los Angeles: University of California Press.
松尾瑞穂
2013a 『インドにおける代理出産の文化論―出産の商品化のゆくえ（ブックレット《アジアを学ぼう》29)』風響社。
2013b 「インドにおける生殖ツーリズムと代理懐胎―ローカル社会との関わりを中心に」日比野由利編『グローバル化時代における生殖技術と家族形成』日本評論社、pp.33-52.
荻野美穂
2009 「代理出産の意味するもの：『搾取』と『自己決定』の間で」『大阪大学日本学報』

28: 21-39。
大越愛子
2008 「懐胎・分娩はいかなる労働か」『倫理学研究』38: 3-14。
Pande, Amrita
2009a "Not an 'Angel,' not a 'Whore': Surrogates as 'Dirty' Workers in India." Indian Journal of Gender Studies 16(2): 141-173.
2009b " 'It May Be Her Eggs But It's My Blood': Surrogates and Everyday Forms of Kinship in India." Qualitative Sociology 32:379-397.
2010a "At least I am not Sleeping with Anyone: Resisting the Stigma of Commercial Surrogacy in India." Feminist Studies 36(2) 292-312.
2010b "Commercial Surrogacy in India: Manufacturing a Perfect Mother-Worker." Signs 35(2): 969-992.
日比野由利
2011a 「インドの商業的代理出産と法規制」『産科と婦人科』78(4): 497-503.
2011b 「アジアの生殖医療サービス―インドの商業的代理出産」『女たちの21世紀』66: 29-32.
2011c 「インドの商業的代理出産と生殖ツーリズム」日比野 由利・柳原 良江 編『テクノロジーとヘルスケア―女性身体へのポリティクス』、pp. 189-204。
Ragoné, Helena
1994 *Surrogate motherhood: Conception in the Heart*. Boulder: Westview Press.
貞岡美伸
2009 「代理出産の自己決定に潜むジェンダーバイアス」Core Ethics(5): 191-200.
Shanley, Mary K.
2001 *Making Babies, Making Families: What Matters Most in an Age of Reproductive Technologies, Surrogacy, Adoption, and Same-Sex and Unwed Parents' Rights*. Boston: Beacon Press.
Teman, Elly
2008 "The Social Construction of Surrogacy Research: An Anthropological Critique of the Psychosocial Scholarship on Surrogate Motherhood." Social Science & Medicine 67: 1104-1112.
2010 *Birthing a Mother: The Surrogate Body and the Pregnant Self*. Los Angeles: University of California Press.
常田夕美子
2014 「赤ちゃん工場、賃貸用の子宮―インドにおける代理出産をめぐって」檜垣達哉編『バイオサイエンスは人間をどう変えるのか』勁草書房、pp.142-166。
Vora, Kalindi
2009 "Indian Transnational Surrogacy and the Commodification of Vital Energy." Subjectivity 28: 266-278.